

せせかむい

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編算室
第七号（毎月一日発行）
平成二年五月一日

古平の地名

近藤 芳二

十二、オタネココ（浜町）

「フルビラ川、川巾八間といえども水は少し斗也。並てヲカワと云字（あざ）等有。越てオタネココ並て浜素通りにして岬少し廻りメナシトマリ。」

（再航えぞ日誌）

「五月四日の出立、砂浜（三町）オタネココ（三町）ホロベツ是則（古平川）」

（えぞ日誌）

現在の地図では、浜町の海岸である。それにしても上の資料では地名の順序が違っているので、その場所に行つて今後調べてみたいと思つている。

また、永田地名解では「沙濱今の濱中村」となつてゐる。

同様の地名は美国の小泊であり、その地形を見ると「オタネココ」「崖と海に挟まれた狭い砂浜」である。

*ここで言う崖とは、地形的に海岸にできた砂丘であろうと考える。

十三、メナシトマリ（沢江）

明治二十九年の地図にのつてゐる地名で、古くから「メナシトマリ」という呼び名は変わつてゐない。

「一町四十間メナシ泊、現名沢江（船澗）と云。東風の時懸るに宜敷故號く是より崖下伝い、海岸暗礁多し。」

（えぞ日誌）

*メナシ・トマリ（東風時の泊地）の意味である。

十四、ヲタスツ・ヲタシユツ

（歌 棄）

現在の沢江トンネルを出た先が、歌棄という地名になつてゐる。この地名は、海岸のところどころにある地名で珍しくはないが、どうもはっきりしなかつた。

ヲタスツ（砂浜の根元の義）（地名アイヌ語小辞典）

海から上がれば砂浜があり、その砂浜をつききつて砂丘を越えると草原がある。その「砂丘が尽きて草原になる辺りを砂丘の根という」という説明であるが、古平の歌棄の場合にはどうも当てはまらないような気がしてならないので、各地にある「歌棄」について調べてみた。すると、どうもこれは「砂浜と石浜の境のような地形」のことを言うのでは——と考えられるのである。

*永田地名解（路傍の義）
*知里博士（砂浜の根元）

~~~~~  
7月の山来事  
~~~~~

- 米日親善協会より古小・沖小に友情人形寄贈（昭和二年）
- 古平・余市間に札幌自動車K Kが定期バスを運行（三年）
- 沢江村で火災、二戸全焼し二名が焼死する（四年）
- 古平・余市間の郵便物の託送に夏期自動車を利用（七年）
- 泥の木青年団がドロノキ千三百本を植樹する（十四年）
- 戦時中丸山国有地を家庭耕地として借用する（二十年）
- 新学制により古平中・稲倉石中が開校する（二十二年）
- 平田リキが女性として初めて町議会議員に当選（同年）
- 教員のデザインによる古平中学校校章が制定（同年）
- 開校一周年を記念して古平中学校校旗を制定（二十三年）
- 明和小学校に部落と共同の電話が架設される（同年）
- 古平町大火、七百戸余りを全焼、死者二名（二十四年）

故郷を想ひ

福井幸平

世の中、有名選手ばかりが記憶に残るとは限りません。旧小

学校の中庭にあったテニスコートで、いつも御用籠を肩にして

たおじさんがいた。放課後籠をほっぽり出して、先生方とテニ

スをやっていた。私は、「変わった人だな」と、見るともなしに

窓からのぞいて掃除も忘れていた。ラケットで打ち合うのを興味

深く見ているうちに、次第におじさんに応援したくなった。

そのうちに、はげ頭から汗がぼうぼう湯気を立ててきた。そ

のことがあってから、そのおじさんが来ると楽しくなった。そ

の人の名は、半の父さんだと教えられた。雨の降る日はピンポ

ンをやっていた。なぜこの人のことが忘れられないのか、私には

分からない。

こんな話は息子にもしたことがない。思い出したら、また昔

のことを書いてみたい。

老人の昔の自慢話は、若い人には嫌われるので、私は、若い

人に将来の夢を語り継ぎたい。これまでも、よく人に聞かれ

る。

A君 — 「福井さんは好きだなあ」、私は答えようがない。

とぼけて、「なにが？」
こう聞く人は、五十パーセント

からかいと、軽蔑——。
B君 — 「福井さんは、元氣だネ」、私は少し間をおいて、

「いやいやカラ元氣さ。あち

太平洋上であわや遭難?

《身欠鯨》を燃やして助かる

話は古いが——明治二十三年十一月十九日のこと。千葉県

沖、鹿島灘で日本郵船の汽船仁寿丸が、暴風雨のためいつの間

にか大島付近まで流されてしまった。そのうち燃料の石炭も切

れ海上を漂流していたが、誰かの思いつきで、積んでいた《身

こち故障だらけのボンコツさ」

C君 — 親しい友人。「福井さん、年齢を考えてやれ。」

ありがとう。ナニ俺は今青春だぞ!

あの瞬間のはかない炎だよ。もう戻れない。戻る道もなし。吾が道あるなら進むまで——。

〈以下次号〉



欠鯨》を石炭の代わりに燃やしてみることにした。

あぶらの乗り切った身欠鯨のこと、八十俵余りを燃やして、船は無事に東京湾に入港することができたという。

この年も鯨は大漁で、古平で製造された身欠鯨は三千百六十

七石で全道のトップであった。この人助けをした《身欠鯨》

が案外古平産——であったか

も知れない。(小樽新聞より)

■田中北海道知事が大火の状況を視察に来町する(同年)

■海難救助の勇松丸が日本水難救済会会長より表彰(同年)

■古平中学校校友会が解散して生徒会が発足する(二五年)

■古平町長に伊藤由松が初当選をする(同年)

■台風の被害で古小体育館が危険のため使用禁止(二七年)

■古平・余市間道路が国道二二九号線に指定(二八年)

■恵比須橋がコンクリート橋になり渡橋式を行う(二九年)

■余別・入舸両村と町村合併についての協議をする(同年)

■役場山本清主事が出張先で死去、役場葬を行う(三三年)

■古平高等学校が校章を制定する(三五年)

■HBC・TVで古平町の観光名所を紹介する(三七年)

■古平柔道同好会を結成する、会長福井幸平(三八年)

■港町に町営へみなど保育所を開設する(四三年)

■公募による古平町町旗を制定する(同年)

これは、随分と古い思い出になりますか——。

今から六十五年程前に溯り、色々なことを思い出すままに綴ってみました。

私が小学校一年生の頃（大正十二年）は鯀が大々漁で、親父は鯀刺網をしていた。

当時は、入船町のイ山口さんの大きな家の前の浜を借りていた。右側が

□竹本さんの鯀廊下、左側は仲谷さんの浜で、船は保津船を使って、親父と、江差方面から永年働

きに來ている漁夫二人の三人で乗り組み、漁夫は家の二階で寝泊まりをし、家族と食事を共にしていた。

前浜では、鯀建網が歌棄から丸山岬までの間に三十か統以上も建込まれていた。夜になると、親父に連れられて掛け廻しに行つた。

掛け廻しというのは、建網に鯀が乗網すると網を起こすので、それを聞いてから刺網漁船が

投網のために網を積んで行くので、その様子を見るために行くことである。

起船についているランプが点々として、前浜に建網の位置を知らせている。どうやら建網を起こし始めたようだ。一か統、二か統と、次々に起こし始め「きり声」もかかった。

相当の漁がある模様だ。親父は二人の漁夫と網を積んで出た。群来村（今の群来町）のトマリサンという所で、そこは千石場所と聞いていた。

翌日は思ったとおり、前浜には桙船が何隻もいてサンバ船に鯀を積んでいる。親父たちの乗った刺網が帰つて來た。「群来掛り」といって、網の目が見えない程鯀が掛かっていた。家が総出で鯀をはずし、も

つこで「ナツポ」に運ぶ。仕事が終わつて家に帰る時は暗くなっていた。学校は鯀が大漁で休みとなった。昼ご飯は、浜で茶碗に冷たい味噌汁をかけ

て大急ぎですませる。また、すぐ仕事にかかり、途中で黄粉をまぶしたおにぎりを食べる。腹がへつているので何を食べてもうまかった。なにしろ一年分の生活費をこの期間に得るのであるから、家族皆がほんとに一生懸命働いた。

同じ浜で、飛沢さんも刺網をやっていた。札幌の学校に行っていた悦三さんという人も学校が休みなのか、学生服をドンザに着替えて働いていた。近所の人たちがそれを見て、「よく働く」と感心していたのが記憶にある。

親父は、普段はきざみ煙草を吸っているが、鯀場になると箱に入った「胡蝶」という、十本入りで木のパイプがついている煙草を吸った。飛沢商店によく使いに行つたが、蝶の絵が描かれていて一個五錢だった。

大漁の年も何年か続いたが、高等科を卒業した昭和六年の春は薄漁で、この頃から、樺太へ出稼ぎをする人が多くなつたように思う。（つづく）

STV・TVが禅源寺の五百羅漢を紹介する（四四年）

■学校開放事業がスタートし古平小が指定される（四五年）

■柔道、剣道連盟が、柔道、剣道教室を開く（四六年）

■花の木幼稚園先生と父母の会を結成する（同年）

■サケの稚魚二十万尾を初めて古平川に放流する（四九年）

港町裏山の

【お稲荷さん】

今ほもう跡形も無いが、昭和の始め頃まで、港町の裏山にある稲荷さんの祠（ほこら）があった。そのそばに生えていた桜は今でも花を咲かせている。

ソーラン節に、
へ鯀來たかと

稲荷に聞けば
どこの稲荷も

コンと鳴く
……………

そんな文句があるが、

旧「美国街道」あれこれ

石塚 実

今、自分の記憶をたどって行く、新地町の古盛座（大火以前まであった芝居小屋）の前から、丸山川を渡り、山岸を崩して作った「美国街道」というのがあった。

丸山川に沿って登って行き、へ口カラエス（今の群来町のこ）の家並を経て美国へ通じる道路のことである。

「確かこの辺りを通っていたがなあ——」
と、その跡を尋ねてみても、そのことを示すものはもう何も残ってはいない。

その頃は（私が小学校に入学する前）、群来村には人家が沢山あり、小学校もあった。当時、丸山町に住んでいた先生が、毎日この道を通って学校へ行ってたことを覚えてる。

新地町の裏手にあった新地分

教場が火事になり、旧高校の所に新しく新地分教場が出来て、群来小学校と一緒にあった。それ以来その先生の姿を見ることになかった。

また、美国や積丹方面へ往來する旅人も多く、その旅人を運ぶための客馬車があった。定期的にあつたのかどうかよくわからないが、美国から浜町まで走っていたように思う。馭者台で手綱をとる小父さんは鼻髭を生

★丸山《のろし台》★

丸山の《のろし台》は、町の数少ない遺跡の一つであり、頂上まで遊歩道がついたので登り易くなった。頂上に立つと、木の間から厚苔岬が眼下に、美国岬から遠く積丹の絶壁が続き、反対側にシリバ岬が向かい合うように見える。のろしを上げるには格好の場所であつたろう。古くから緊急の合図に使われたのろしは、「狼煙」とも書かれるように狼のくそ（屎）をく

やした人であつた。夏は馬車、冬は馬棧であつたが、その馬の首に着けた鈴の音がよく聞こえた。家が道路のすぐそばにあつたので、子供の頃に聞いたあの鈴の音がとても懐かしく思い出される。

昭和の初め頃、また一段と高い所に新道が建設されてからは、何処にあの道路があつたのかわからなくなつてしまつた。

（以下次号）

べた。そうすると、煙が真っ直ぐに上がりなびかなかつたという。後には火薬等を使って、その色によって合図をした。

このような色とりどりののろしはともかくとして、あの丸山頂上からのろしを上げ、それにこたえてシリバ岬や積丹の岬からもろしが上がったら、伝説の中からもろしとなくロマンを感じるのではなからうか。何かのイベントとして、「のろしでも上げてみよう」というグループの現れるのを心待ちしている。

「この裏山できつねが、「コン、コン……」と鳴くと、いいことか、或いは悪いことかわからないが、とにかく何かが起きるといふ。」

中にはその鳴き声を聞いて、「今年は大漁だベエ——」と張り切る親方もいたそうだ。

鯨がとれなくなると、次第にお稲荷さんを信仰する人も居なくなり、その祠も何時の間にか無くなつてしまつた。

「したどもこのごろだけ、え（家）の裏サ、しょっちゅうキツネ来てるウ——」

（港町・細野六次郎さん談）

あとがき

野山を一面に覆な程早くつけて、今は谷間をはうようにして輝いています。

桜も咲きはじめ、ゴールデンウィークを目前に北海道にも春が一気にやって来ました。

今回、本間銀朔さん（本町）石塚実さん（新地町）からの原稿も載せることが出来ました。ありがとうございます。